

ヴィトゲンシュタインは規則をどのように論じたか

——言語とゲームのアナロジー——

姓名：白木 啓吾 (Keigo Shiraki)

所属：中央大学

本発表の目的は、ヴィトゲンシュタインが「規則」をどのように論じたのかを明らかにすることである。ヴィトゲンシュタインは言語とゲームのアナロジーを通して規則を論じており、その議論は二つの仕方で解釈されてきた。一方では、ゲームが規則に支配されているのと同じように、言語も規則に支配されているという前提に立って規則を論じているとされる（標準的解釈）。他方では、言語は規則に支配されてはいないが、言語とゲームとの間には重要な類似性があるために、規則が比喩的に論じられているとされる（非規則的解釈）。本発表は、前期『論理哲学論考』から中期を経て後期『哲学探究』に至る議論を追従することで、ヴィトゲンシュタインが規則をどのように論じたのかを明らかにすることを目指す。

言語は規則に導かれた活動である（*language is a rule-guided activity*、以下 RG と表記）という考えは、哲学において広く受け入れられてきた見解の一つである。古来から、言語の意味は単なる自然（*physis*）の問題ではなく、人間の慣習（*nomos*）に依存することが論じられている。この考えは現代の言語哲学にも強い影響を与えている。実際、ヴィトゲンシュタイン解釈においても、標準的解釈（Hacker, Glock など）では RG をヴィトゲンシュタインの思想の核心に位置づけ、言語は本質的に規則に支配されていると解釈する。それに対して、非規則的解釈（Hanfling, Glüer & Wikforss など）は、RG はヴィトゲンシュタインの後期思想に適用できず、規則はあくまで比喩にすぎないと考える。両者の対立は、「規則に支配されている」という性質を言語とゲームの類似点とみなすのか、むしろ両者を分かつ差異とみなすのかに集約される。

以下では、ヴィトゲンシュタイン哲学を三つの時期に区別しつつ、それぞれの時期に対してどのような解釈上の対立が生じているかを整理する。

まず、前期『論理哲学論考』においては、中期や後期ほど詳細ではないが、論理的シンタックスの規則（*rules of logical syntax*）として、言語の規則が論じられている。標準的解釈はこのことから、前期においても規則は言語にとって重要な位置付けにあることを主張する。これに対して、非規則的解釈は、規則と法則が区別なく語られていることや、言語使用者が規則とどのように関わるのかという問題が論じられていないことから、規則は重要視されていないと主張する。したがって、規則の重要性をどの程度まで見積もるかが、前期における争点である。

次に、中期になると、規則は明確に言語の中心に据えられる。意味は文法規則によって構成されるのであり、したがって規則に従うことではじめて言語は有意味となる。この点に関しては、標準的解釈はもちろん、非規則的解釈も認めており、中期においてヴィトゲンシュタインが RG を受け入れていたことについて対立はない。ただし、この時期のヴィトゲンシュタインの議論は緊張をはらんでいる。すなわち、一方では、上述したように、言語が有意味であるためには規則による導きが本質的であるとヴィトゲンシ

ユタインは主張する。他方で、ヴィトゲンシュタインはまた、私たちが言語を用いる際には実際には規則に導かれているようには見えないことや、そのような導きを要請しても解釈の無限後退に陥ることに気がついている。後期への移行はこの緊張の解消を目指したものである。

最後に、後期『哲学探究』では、規則のパラドックスを中心とした規則に関する議論が、解釈による無限後退を中心とした中期の緊張を解消するために展開される。この議論をどう理解するかが、RGをめぐる論争の最大の争点となる。標準的解釈は、後期においても言語は規則に支配されており、中期から後期への移行は規則の理解をより現実的で「地に足のついた」ものへと深化させたと考える。すなわち、そこではただ、規則の「隠された計算モデル」と「主知主義的な規則遵守の像」が撤回されただけであり、大きな変化はなかったと考える。それに対して非規則的解釈は、後期においてはむしろRGという考えそのものが放棄されたとみなす。非規則的解釈によれば、『哲学探究』の規則論は、RGという前提を捨てなければ整合的に解釈できないのである。このように、RGをめぐる解釈の分岐は、後期において最も鋭く表面化する。

以上の整理から明らかなように、ヴィトゲンシュタインの議論には、前期・中期・後期それぞれに異なる仕方でRGをめぐる解釈上の争点が存在する。前期では規則の位置づけをめぐる評価が分かれ、中期では多くの研究者がRGを認める一方で、無限解釈の連鎖という内的緊張が残された。後期に至っては、言語と規則の関係をどのように理解するかをめぐる、標準的解釈と非規則的解釈が根本的に対立する。本発表は、この三つの時期の変遷を追従することで、ヴィトゲンシュタインが「規則」をどのように論じたのかを明らかにする。

(参考文献)

Glock, H-J. 1996, *A Wittgenstein Dictionary*, Blackwell.

——2009, "Meaning, rules, and conventions," *Wittgenstein's Enduring Arguments*, ed. Zamuner, E. & Levy, D. K. Routledge, pp. 156-178.

——2024, "Unruly Wittgenstein," *Normativity, Meaning and Philosophy: Essays on Wittgenstein*, Glock, H-J. Anthem Press, pp. 223-238.

Glüer, K. & Wikforss, Å. 2009, "Es braucht die Regel nicht: Wittgenstein on rules and meaning," *The Later Wittgenstein on Language*, ed. Whiting, D. Hampshire, Partridge Macmillan, pp. 148-166.

Hacker, P. M. S. 2001, "Wittgenstein and the autonomy of humanistic understanding," *Wittgenstein, Theory and the Arts*, ed. Allen, R. & Turvey, M. Routledge, reprinted *Wittgenstein: Connections and Controversies*, ed. Hacker, P. M. S. Oxford University Press, pp. 34-73.

Hanfling, O. 2002, "Does language need rules?," *Wittgenstein and Human Forms of Life*, Hanfling, O. Routledge, pp. 51-65.

Wittgenstein, L. 1922, *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge.

——2009, *Philosophische Untersuchungen, Fourth edition*, ed. Hacker, P. M. S. & Schulte, J. Wiley Blackwell.